ことは一度もなかったです」（弟の同級生）

八月三十日、Aくんは荼毘に付された。やりきれなさばかりが残るこの事件は、どう展開するのか。

前出の捜査関係者が語る。

「きっかけは些細なことだったのかもしれないが、現場だけをみれば、残忍さは際立っていた。動機の解明はこれから。責任能力の有無も含めて、難しい調べが予想される」

里親同居一年で「転落死」
杉並3歳女児に医師が抱いた疑問

〈昨年8月に乳児院から委託した里子の○○が、突然亡くなりました〉

そう綴られた手紙は、東京都杉並区内の住宅で遺体が発見された女児（3）の〝遺族〟である里親が、認めたものだ。

社会部記者の解説。

「二十四日早朝六時前、地下一階にある鉄製のらせん階段下で女児が倒れているのを家族が発見した。この家は地上二階、地下一階の造りで、寝室は地下にあった。発見後、救急車を呼び病院に搬送されたが、その後死亡が確認されました」

近所で里親である田中家（仮名）について聞くと、

「会社員のご主人と働いている奥さん。二人のお子さんの四人家族に里子を引き取ったんですが、家の中から叱り付ける声や、子どもの泣き声などは一切聞いたことはありません」（近隣住民）

第一報で女児の頭部に「不審なあざがあった」と報じられたことや、近所を騒がせたことを詫びるため、田中さん夫妻が近隣宅の郵便受けに投函した手紙にはこうある。

〈私たちが起きた時には既に呼吸をしていない状態で、すぐに救急車を呼び、心臓マッサージも試みましたが、病院到着40分後、死亡と認定されました〉

メディアは世上の虐待の報道に伴い、私たちが○○に何かしたかのように報じ、（略・子供の）心に深い傷を負わせてしまいました〉

手のかからないいい子

生後すぐ乳児院に預けられた女児が田中家に同居し始めたのは、およそ一年前。田中さんの妻はブログで、仕事やボランティアに追われる多忙な日々の合間にも、育児への喜びや悩みを綴っている。

田中さんの夫は、時折涙を浮かべながらこう答えた。

「家内が社会貢献をしたいということで里親になりました。（女児は）優しく、本当に手のかからないいい子でした。事故前日にも保育園のプールに入り身体に傷などがなかったことは確認を取ってもらっています。虐待死などでは絶対にありません」

一方、女児の遺体を確認した医師は違和感を覚えたという。その状況を聞いた、ある医療関係者が語る。

「死因は脳ヘルニアでした。遺体を精査したところ階段から落ちたという家族の説明とつじつまが合わず、虐待の可能性が疑われる傷があった。そこで病院のソーシャルワーカーが杉並児童相談所に『虐待通告』を行ったのです」

また、家族が警察に説明した発見の状況についても、

「死亡するほど強い衝撃で転落したのに、近くで寝ていた家族が数時間も気づかなかったのも不自然な感じがしたそうです」（同前）

現在、警察による任意の聴取など慎重な捜査が続いている。杉並児童相談所は、

「この一年間に家庭訪問などを複数回行っていたが、虐待を疑うような報告はなかった。また委託にあたって安全に住めるように建物内の改善も行われていた」

というが、預けられてわずか一年での「転落死」。家の構造や家庭環境を精査したうえでなされる委託決定が、きちんと機能していたのか、検証は必要だ。

医療ジャーナリストの伊藤隼也氏は言う。

「安心できる環境で育てられるはずだった女児の命を守れなかったことの原因はどこにあるのか。現在の里親システムは制度疲労を起こしているのではないでしょうか。児相も管轄の東京都も、徹底した調査を行い責任の所在を明らかにすべきです」

地下一階で倒れていた

転載・引用禁止